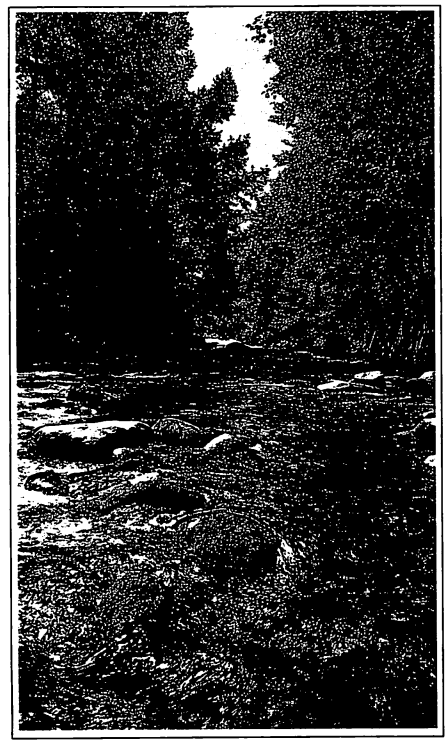
川や海、森や湖に触れる機会が多い釣り人は、
動植物たちの次に、環境の変化に
敏感でいられる存在なのかもしれない。
だからこそ、できること、
やらなければならないことがある……

第5回



河畔林が豊かな川には魚も多い。
魚を殖やすためには、河畔林を守り
育てていくことが大切だ

森と川と海はひとつ

釣り人も協力したい 河畔林再生の試み

**河川法の改正により、「川は国民のもの、国は管理を任されているだけ」という
精神が明確にされた。そんななか、豊かな水辺環境の復活をめざし、
河畔林の再生をめざす取り組みが始まっている。
しかし、そんな活動をする市民グループのなかに、釣り人の姿は少ない。
釣り人は今、魚を守るためにキャッチ&リリースを実践し始めている。
しかし、それだけでは片手落ちではないだろうか。
豊かな環境がなければ魚は戻ってこない。
視野を広げ、水辺環境について見つめてみたい**

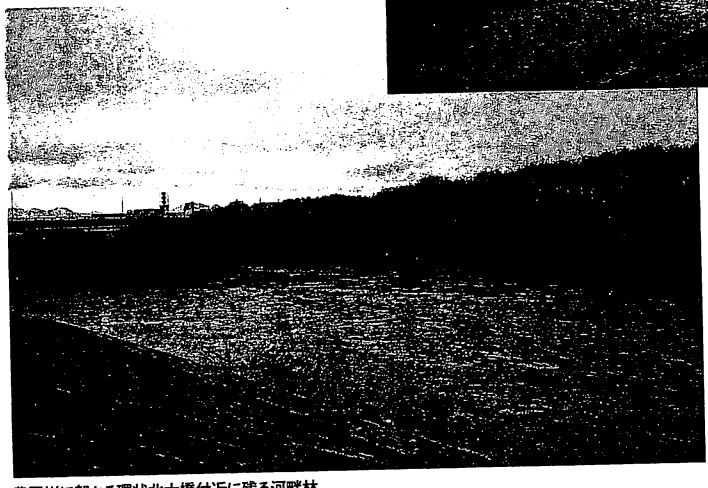
写真・文◎
滝川康治（ルポライター・下川町在住）

豊平川の水辺環境に変化の芽

支笏湖にほど近い小漁岳に端を発し、札幌市内を貫いて流れる豊平川。中流域は扇状地を形成し、かつては変化に富んだ水辺の姿があった。が、180万人都市になった今、市街地の近くに豊かな河畔林は極めて少ない。

4月下旬、川の調査や生物の観察などをもとに、水辺環境について提言している「豊平川ウォッチャーズ」の代表、竹中万紀子さんに案内してもらい、中流域の河畔林の現状を見てまわった。

下流側は川岸ぎりぎりまで伐採されていた



豊平川に架かる環状北大橋付近に残る河畔林。市街地で典型的な河畔林の姿が残る貴重な場所

環状北大橋付近の左岸側400～500mにわたって、かろうじて昔の面影が残る河畔林があった。

「明治時代の地図と見比べると、（中流域で）典型的な河畔林が残るのはここくらいですよ」と竹中さん。橋の上流側は、中州とあわせてよい状態が保たれている。野鳥の種類も多く、カワセミも生息しているらしい。河畔林の下には深い淵があり、魚たちにとっても絶好の休息場所になっている。

4年前、消防車が川に横付けして取水する施設を整備するため、橋の下流側の河畔林がバッサリ伐られた。

「本当に必要な施設か？」と疑問を抱いた竹中さんらが、「豊平川ウォッチャーズ」を旗揚げするきっかけになった事件だ。

当時、札幌河川事務所に電話すると、「（河畔林を伐らなければ）洪水の時にどうするんだ」と、けんもほろろだった。しかしその後は、行政側も同会の問題提起に応えて、河畔の植生保護を呼びかける看板を設置したり、水辺のあり方について話し合うなど、ずいぶん変わった、という。

右岸側の多くは札幌市が占有し、河畔には公園などが造成されてきた。河畔に草地がないと野鳥や魚のエサになる虫が乏しくなる。同会は市に対して、草を刈らないように何度も要望してきた。市もこれを一部受け入れ、今ではヨシなどが戻ってきたところもある。

「これはひとつの布石なんです。私たちはことあるごとに行政に情報を提供するように努めているし、河川法が変わった今、河川管理者も市民に近づこうとしています。河畔林を再生させ、コンクリート護岸を何とかすれば、もっと水辺の環境はよくなるでしょう」（竹中さん）

幌平橋付近にも、若干の河畔林があった。しかし、ずいぶん幅が狭く、貧相に見える。樹種はヤナギばかりで、河畔などでごく普通に見られるハンノキは数えるほどだ。

河床にブロックを敷いて木が生えないようにしていたのだが、自然の力で土砂がたまり、ヤナギが群生したらしい。ところどころにワンドができて、稚魚が集まりやすくなったところもある。自然の力はたくましい。

このヤナギ、以前は、増水時に川の流れの妨げになるとして、すべて伐採されていた。しかし、竹中さんらの要望によって、河川事務所は今年から、幹の太いものを残す方法に変えた。これによって、野鳥や魚にとってささやかなエサ場ができた。

「パイロット的な仕事を豊平川でやっているのはすごいこと。活動を始めた4年前に比べると隔世の感がします」

竹中さんが感慨深そうに言う。

ここ数年、同会など市民の活動が静かな広がりを見せている。97年秋には、札幌周辺の河畔林や森林を保全していく目的で「水と緑のネットワーク」も結成された。豊平川での試みも、こうした取り組みとつながるものだ。

水辺環境を再生させようとする芽が育ちつつある。

市街地付近に生えたヤナギは以前はすべて伐採されていたが、今年から幹の太いものを残す方法に変わった

コンクリート護岸の上に自生したヤナギ。これによって緩流帯ができ、稚魚やカモの休息場所になっている

河畔林の役割

森と川とが互いに作用を及ぼす空間域に生まれた林を、一般的に「河畔林」と呼び、生態系の要所になっている。豊かな河畔林がある川には魚も多く、釣り人にとっても魅力があるに違いない。

さまざまな研究の結果、河畔林の働きとして、次のような事柄が分かってきている。

①野生生物の生息場所を提供する。さらに、分散している〝すみか〟をつなぐ移動路にもなる

②魚や水生昆虫などに食物を供給する。魚や両生類などの隠れ場も提供する

③樹冠などによって太陽の光を遮断し、水温の上昇を抑える

④落ち葉によって多量の有機物を川に供給する

⑤川と水辺域との緩衝帯として機能し、良好な水質を保持するフィルターの役割を果たす

⑥洪水時に河岸の浸食を防ぐ

⑦人々のストレスを取り除き、疲れを癒してくれる

いずれも釣り人にとって、関係の深いものばかりではないだろうか？　こんな話もある。

「北海道にいるサケ科魚類の生息限界温度は25～26℃で、高水温に弱い。河畔林の伐採で流路が開放された区間が長いほど深刻な影響をもたらす」

「川に供給される落ち葉の量は、広葉樹林で1㎡当たり300～500gで、トビケラやカワゲラ、ガガンボの仲間などの幼虫やヨコエビに食べられる」（「水辺域管理のための提言」検討委員会の提言資料の一部を要約）

河畔林の世界は奥が深く、研究が進んでいない分野も多いらしい。

河畔林の働きについては、心ある釣り人なら感覚的に分かっているのではないだろうか。しかし、こうした河畔林の大切さをきちんと理解し、開発などで伐採が進んでいる現実を、真正面から捉えてきただろうか。「この川も釣れなくなったか。別の川を捜そう」と、やすきに流れてきたのではないだろうか。

大都市を貫く豊平川のように、急流河川のために治水安全度を高めたり、狭い河原を公園化した結果、河畔林を失った川。コンクリート護岸が続く都市部の川。農地開発によって河畔林がつぶされ、川岸まで畑や牧草地に変えられた農村地帯の川…。いまや北海道のいたるところにこんな川があふれ、かつての河畔林の姿を見ることはできない。

植樹運動が教えてくれた「森・川・海はひとつ」

水域と陸域をつなぐ河畔林を再生させるには、どうすればよいのだろうか？　本連載第2回「西別川再生をめざす人たち」のなかでも紹介した植樹運動は、多くのヒントを与えてくれる。

この取りくみの発端は、'88年に北海道漁協婦人部連絡協議会（道漁婦連）が創立30周年の記念事業として始めた「木を植えて魚を殖やす運動」にある。「100年かけて100年前の自然の浜を」を合言葉に、次のような目標を掲げた。

「河川、湖沼、海などの生活の場がどうなっているか自ら知ろう」

「植樹運動を通じて森林組合の人々と手をつなごう」

「地球規模の環境破壊に鋭く目を向け、行動を起こそう」

道内各地で行なわれた植樹運動のネーミングは「サケの森づくり植樹祭」や

「昆布の森づくり」などさまざま。植える場所も前浜の近くの山や公園、ふ化場…と多彩だが、浦河町内の月寒川や釧路川上流の河川敷などのように、河畔林の再生を願うものもあった。

この運動に触発されたのが、別海町が'94年から取り組んでいる「魚を育む森づくり事業」だった。西別川の両岸に苗木を植えて河畔林を再生させるもので、10年間で103haの植樹を目標としている。地元の釣りグループも参加している。

これらの活動は全国的にも有名になった。「森と川と海はひとつ」を大勢の人に気づかせた、卓越した精神運動といえるだろう。

魚を守りたいと考える釣り人なら、学ぶところが多いはずだ。

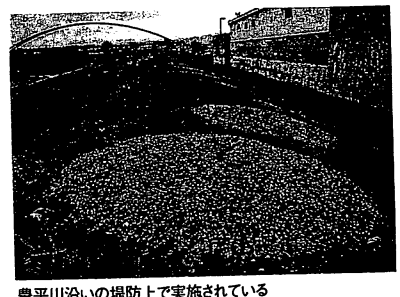
住民参加で自然林再生の試み

「生態学的混播(こんぱ)法」と呼ばれる緑化手法によって、川の周辺などに自然林を再生させる試みも、各地で広がりをみせている。

これは、タネや小苗による自然林再生法で、洪水氾濫や噴火などで生まれた裸状の土地で森が再生する過程を応用して開発された。

その手法を簡単に紹介したい。まず、河川敷などに直径3mほどの円を描き、この中に近隣の森から拾い集めた樹木のタネや、実生群のポット苗を10種類ほど植える。円内では、植えたタネや苗が成長しながら生存競争を繰り広げ、最後には1本ほどが生き残る。約30年後に、自然林を再生させることを目標にしている。苗を一定の大きさに育ててから行なうこれまでの植樹に比べ、簡易で維持管理も必要ないという。

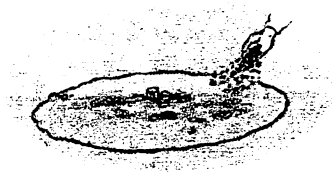
この試みは、北海道工業大学の岡村ゼミと道開発局開発土木研究所環境研究室の共同プロジェクトとして、'91年に尻別川の河畔でスタートした。石狩川や釧路湿原にある遊水池の堤防、旭川の牛朱別(うしゅべつ)川分水路など、道内約50ヶ所で取り組んできた。札幌市内の東海大付属中等部のように、タネを採取して苗木を育て、定山渓ダムの湖畔に自然林を再生させるという、新しい環境教育を試みるところもある。



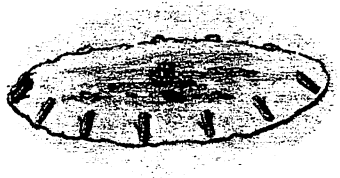
豊平川沿いの堤防上で実施されている「生態学的混播法」の実例。円形に盛られた砂利の下に、さまざまな樹木のタネが植えられている

生態学的混播法とは？

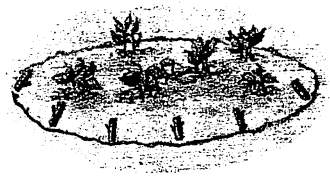
1 タネの採取
近くの森から樹木のタネを集める



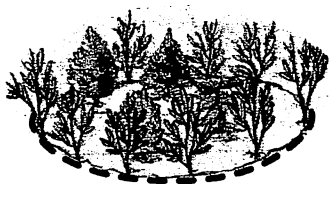
2 杭打ちとマルチング
目印になる杭を打って直径3mの円を作り、その中に砕石や木片を敷く



3 円の周りにヤナギの木を挿し木する



4 タネの混播とポット苗の植栽
円の中に10種類ほどのタネとポット苗を植える



5 生存競争
植えたタネや苗が自然の力で成長しながら生存競争を繰り広げ、最後に1本程度が生き残る

6 30年後
自然林の再生

「住民参加による自然林再生法―生態学的混播法の理論と実践―」(㈳石狩川振興財団発行)より抜粋

釣り人も協力したい 河畔林再生の試み

「生態学的混播法」を提唱する道工大教授（土木工学）の岡村俊邦さん(46)は、明治の文豪・国木田独歩が『空知川の岸辺』で描いた鬱蒼とした河畔林を、いつの日にか再生するのが夢だった。

「最初の発想は、『自然により近い河畔林をいかにつくるか』でしたが、始めてみると私たちにはタネの採取や育苗に限界があった。地元の人にやってもらうことが一番いいと分かり、参加を呼びかけてきた。タネを採れば、『自然の林はどこにあるのか？』と気づき、そこから自然に対する理解が深まるはずです」

そう話す岡村さんは、住民参加による混播法の普及に力を入れている。前出の中学生や自治体関係者、自然保護団体のメンバーなど、参加者のすそ野は広い。マンション建設による河畔林の伐採問題でゆれた札幌の精進川（豊平川水系）でも、昨年来、市民グループが混播法のための苗床づくりなどに取り組み始めた。

「人任せではなく自分たちで植えていけば、『川とどう接していくか？』を考えるようになる。そのきっかけに混播法を活用してもらえばいい」（岡村さん）

「生態学的混播法」を提唱する北海道工業大学教授の岡村俊邦さん。市民参加による河畔林の再生をめざし、さまざまな活動を展開している

この試み、当初からの経緯もあり、開発局が直接間接にかかわることが多い。岡村さんと一緒に混播法を研究してきた札幌河川事務所長の吉井厚志さんは、「開発局の事業で実施する、場所を提供する……など、いろんなやり方があるが、主役は地域の人たち。住民のリーダーを『緑の里親』と名づけていますが、気長に里親をやる人が増えてほしい。役所は土地を提供し、住民は作業を、学者はコーディネートする……という関係がいい。いままでの形とは違う、新たな公共事業としての位置づけを考えていきたい」と意欲的な姿勢を見せる。

「豊平川ウォッチャーズ」の竹中さんも参加型の試みを評価するひとりだが、環状北大橋近くの堤防での混播法の実例を前に、「堤防に木を植える前に、今ある生き物を保全することのほうが大事。土の中にある植物のタネを大事にして、自然に生えるのを待つという考え方も必要ではないか……」と首をひねっていた。

その土地に適した河畔林を再生するにはどうしたらよいのか。さまざまな課題と議論の余地もありそうだ。

試験地の推移

尻別川下流'91年10月22日

'97年10月1日

「住民参加による自然林再生法—生態学的混播法の理論と実践—」（財）石狩川振興財団発行）より抜粋

やってみよう 釣り人からの発信

失われた河畔林の再生に向けて、釣り人にもできることはないだろうか。

釣り人の多くは、河畔林の働きを漠然と分かっているはずだ。しかし、深く考えてみた人は案外少ないのかもしれない。釣りの好ポイントと林の状態の関係、川の地形や汚れ、木々から落下する昆虫のようす……などは、どれも密接につながっているはずだ。よく観察して、河畔林を考えることから始めてみてはどうだろう。

豊平川の河畔林の現状を現地で説明してくれた「豊平川ウォッチャーズ」代表の竹中万紀子さん。河畔林再生のために釣り人ももっと発言してほしいと話していた

市民グループなどの植樹活動に、釣り人が参加する例はまだそれほど多くはないようだ。「よいことをした」という自己満足に終わる懸念もなきにしもあらずだが、川と河畔林を見つめなおすよいきっかけになるだろう。

前出の「生態学的混播法」を試みるのもひとつのやり方だ。木に登ってタネを採取してみる、ポットで育苗する、植栽活動に参加する……。一度でもそんな活動に参加してみれば、何か新しい発見があるかもしれない。

また、河畔林の再生を試みることも大切だが、これ以上、伐採されないように監視することも重要だ。「豊平川ウォッチャーズ」に代表される市民グループが伐採を中止、縮小させてきたように、釣り人もそんな活動に参加してみてはどうだろう。

今回、豊平川を案内してくれた竹中さんは、釣り人に向けて熱いエールを送っていた。じっくり考えて、行動に移す釣り人が現われてほしいものだ。

「魚がよく釣れるところは、野鳥の種類も多く、渡りの中継地としても大事なところです。『ここは釣れそうだ』と分かる感覚を、川をよくしていく道具にしてほしい。川づくりの会合にも積極的に参加してみてはどうですか?」

「普通の生活者である釣り人から、もっと発言できないでしょうか。例えば、今まで釣れた場所がピカピカの護岸に変わった時、打ちひしがれていないで声を出してほしい。釣り人の強みはデータがあることです。個人でも、グループでも、『ここに魚がいる』というデータを行政に示して説明すると、とても説得力があります。これは、素人(注・釣りをしない人)にはとてもできない作業なんです」

竹中さんが話すとおり、将来の河川環境を考えていくうえで、釣り人が発する声は貴重な材料になるのではないだろうか。残念ながら、今のところ、釣り人の声が河川改修に活かされた例は多いとはいえない。しかし、これからは、釣り人も河川環境に対してもっと発言し、よりよい川づくりに積極的に参加してみてはどうだろう。

連絡先・テキスト紹介など

「豊平川ウォッチャーズ」
☎/FAX 011-572-0032

家の母さんの植樹運動が分かる一冊
■河畔林再生『水を植えて魚を殖やす』
(家の光協会発行)

「生態学的混播法」の分かりやすいテキスト
■樹種選定『住民参加による自然林再生法』
(財)石狩川振興財団発行)

連絡先 札幌市中央区南1条東1丁目5番地
ハイスセンタービル1号館8階の同財団
☎011-242-2242/FAX011-242-2445